



Nihonbashi Opera Tokyo 2019

*Giacomo Puccini*

# MADAMA BUTTERFLY



Sada Yacco. 1901. - Pablo Picasso



日本橋オペラ 2019

歌劇「蝶々夫人」

令和元年

ジャコモ・プッチーニ作曲

Sunday, May 26, 2019 14:00 Nihonbashi Theater Tokyo

2019年 5月26日(日) 14:00 日本橋劇場

## ご挨拶

本日はお忙しい中お越しいただき、誠にありがとうございます。

今回の公演は光栄にも、内閣府関連施策である「明治 150 年」イベントに指定されました。また、令和の年号に入りすぐの公演ということもあり、普段にも増して厳粛な気持ちで舞台を迎えます。

「蝶々夫人」の舞台は長崎、昨年好評を頂いたマスカーニ「イリス」から 6 年後の 1904 年にミラノで初演されました。「イリス」は江戸・吉原が舞台、旧吉原が現在の人形町ということで、ここ日本橋劇場にもゆかりのある作品でした。今回の「蝶々夫人」は、中央区出身の二人の女性、川上貞奴(人形町)、三浦環(銀座)に焦点をあてて、日本人女性が「蝶々夫人」の成立と普及に及ぼした軌跡を追いました。私が特に驚き感激したことは、1900 年パリ万博での貞奴のパフォーマンスが、ヨーロッパ文化のみならず、世界の女性解放運動にも影響を及ぼしたことです。

貞奴は 1908 年に「帝国女優養成所」を開所しましたが、その開所式で挨拶した「新一万円札の人!」実業家の渋沢栄一は、「江戸時代には商人、女性、芸人の三人が虐げられてきたが、明治に入り私たち実業家はようやく認められるようになった。これからは女性と芸人の地位向上を願う。」と語りました。それから 111 年を経て、4 回年号が変わった現在ですが、女性と芸術家の地位向上という渋沢の願いは、未だに道半ばです。

「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし。」とは、吉田松陰の名言です。初代総理大臣の伊藤博文は、松下村塾で吉田松陰に学びました。また貞奴は伊藤博文の愛人でした。つまり吉田松陰が「夢」を見て、伊藤博文が「理想」を抱き、貞奴の夫の川上音二郎が「計画」を立て、貞奴が「実行」した。そして世界の女性を解放したとも言えます。

東京は来年のオリンピックや高層ビルの建築ラッシュに湧いています。中央区も東京の中心、日本の中心として、100 年先を見据えた大きな「夢」をデザインする時代に入ったような気がします。

なお日本橋オペラでは 2020 年 5 月 31 日(日)に、こちら日本橋劇場で第 5 回目の公演を予定しています。皆さまに「さすが日本橋オペラ!」と言っていただけるような「夢」のある公演にしたいと願っています。

日本橋オペラ代表 福田祥子



ブルガリア国立スタラ・ザゴラ歌劇場  
2018 年トルコ公演にて、蝶々夫人(福田祥子)

## 指揮 佐々木 修 (Osamu Sasaki)



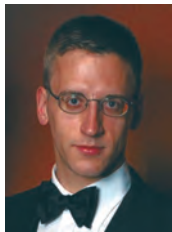
青森県弘前市出身。武蔵野音大卒業。オーストリア政府奨学生。ザルツブルク・モーツァルテウム音大指揮科最優秀卒業。カラヤン、チェリビダッケなどの巨匠に師事。モーツァルテウム音大オーケストラ常任指揮者をつとめる。1979 年カラヤン国際指揮者コンクール入賞。1982 年日本人として初めて、ザルツブルク国際モーツァルト週間で指揮「心から自然でしなやか、新鮮なモーツァルト指揮者」(オペラ・コンツェルト誌)と評価を受け、国際モーツァルテウム財団よりパウムガルトナーメダルを授与される。1984 年ベルリン・ドイツ交響楽団を指揮して、リアス放送新人演奏会に出演。帰国後、日本各地のオーケストラ、合唱を指揮。また NHK や民放のパーソナリティー、音楽番組制作、女性向けモバイルコンテンツ「ルナルナ」の創設、AI 特許など、マルチなタレントで活躍。近年はワーグナー指揮者として「ニーベルングの指環」全曲、「トリスタンとイゾルデ」と連続して指揮をして注目されている。日本橋オペラ常任指揮者。(株)マエストロ代表取締役。

## 演出 田丸一宏 (Kazuhiro Tamaru)



玉川大学文学部外国語学科ドイツ語専攻、日本映画学校卒業。卒業後、テレビドラマ、映画の助監督を経て、演劇へ転向。岡本健一、鈴木裕美、手塚とおる、千葉哲也、小川絵梨子、田尾下哲、野田秀樹などの演出助手を務める。最近では、ミュージカルやオペラの現場にも活動の場を広げている。世界的なドイツ人演出家、ペーター・コンヴィチュニー氏のオペラアカデミー参加。最近の演出作品は、tpt86『小市民の結婚式』(作：ブレヒト)、疎開サロン『エレクトラ』(作：ホフマンスタール)『Play』(作：ベケット)『三文オペラ』(作：ブレヒト)『道成寺・弱法師～近代能楽集ノ内～』(作：三島由紀夫)、田尾下哲との共同演出『ベアトリーチェチェンチの肖像』『プライヴェート・リハーサル』(作：田尾下哲)、オペラチックナイト vol.3『トスカ』、東京ニューシティ管弦楽団定期演奏会『蝶々夫人』(ハイライト上演)など。

## ピアノ パオロ・トロイアン (Paolo Troian)



イタリア・トリエステ生まれ。トリエステ音楽院ピアノ科卒業。同大で伴奏と室内楽の学位を取得。エラスムスヨーロッパ交換留学生としてブタペストのフランチ・リスト音楽大学に学び、ヨゼフ・シマンディ国際声楽コンクールの公式伴奏者をつとめる。フェデリシアナ音楽アカデミーでナツァレーノ・カルージに学ぶ。パオロ・トロイアンは声楽伴奏者、室内楽奏者、コレペティートルとしてミラノ・スカラ座やチロル音楽祭などで活躍する一方、デニア・マッツォーラ、ドウニャ・ヴェイソヴィチ、ジャコモ・プレスティア、グスタフ・クーン、ジャンルイジ・ジェルメッティ、ドナート・レンゼッティ、ピエール・ジョルジョ・モランディらと共演している。

## マダマ・バタフライ役 福田祥子 (Shoko Fukuda) ドラマティック・ソプラノ



大阪音大ピアノ科卒業。大阪芸大大学院声楽専攻修了。第 6 回大阪国際音楽コンクール第 2 位。東京二期会オペラ研修所本科首席修了、優秀賞受賞。ワルキューレ、ジークフリート、神々の黄昏、トリスタンとイゾルデ、蝶々夫人、椿姫、ドン・カルロ、トゥーランドット、トスカ、イリス、ユージン・オネーギン等に主役として出演。『圧倒的にして鮮烈な歌声と存在感。生まれながらのブリュンヒルデ』と絶賛される。また CD「イタリア・オペラアリア集」は、『日本にも真に世界にも通用する本格的なオペラ歌手誕生か』(音楽現代等)と推薦を受ける。ウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場で研修を受け、2015 年からはスタラ・ザゴラ国立歌劇場(ブルガリア)、コシチェ国立歌劇場(スロバキア)などで、蝶々夫人、トスカの主役として度々出演、絶賛されている。東京二期会、関西二期会各会員。日本橋在住。日本橋オペラ代表。



ピンカートン役 上本訓久（Norihisa Uemoto）テノール

洗足学園音楽大学、同大学大学院を共に首席で卒業。読売新人演奏会に出演。卒業後、ナポリに渡り国立サレルノ音楽院に入学し、E. カパーチェ氏に師事。ナポリのカンピ・フレグレイ国際声楽コンクールで第一位。ナポリ、サレルノ等でコンサートに出演。帰国後、オペラでは30以上のプリモテノール役で出演。他にヴェルディ、モーツァルトのレクイエム、ベートーベンの第九等出演。CD「誰も寝てはならぬ」「グランデアモーレ」「グリダール」が発売中。FM市川うららで第2、4の土曜日、隔週グリダールのパーソナリティーで放送中。藤原歌劇団団員。



シャープレス役 飯田裕之（Hiroyuki Iida）バリトン

東京芸術大学音楽学部声楽科を卒業。ドイツ・ウィーンのセミナーにてディプロマを取得。これまでに105作品・300公演以上のオペラ・オペレッタ・ミュージカルに出演。中でもモーツァルト『フィガロの結婚』フィガロ、グノー『ファウスト』メフィストフェレス、レハール『メリー・ウィドウ』ダニロ役を得意とする。その洗練された輝きのある声と歌唱力はもちろんのこと、存在感のある舞台姿、また根っからの芝居好きで自在な演技でもたくさんの観客を魅了し、喝采を浴び続けているバリトン歌手である。また現在では、そんな彼の魅力を凝縮したソロ・リサイタルが人気を集めている。2018年11月よりFMふくろうラジオ番組「風の丘かぜ便り」（毎週土曜14:30-）のラジオパーソナリティーを務めている。



スズキ役 栗田真帆（Maho Kurita）メゾ・ソプラノ

東京芸術大学声楽科卒業。聖徳大学大学院音楽文化研究科博士前期課程修了。同大学院研究生修了。これまでに「ヘンゼルとグレーテル」や「ラ・チェネレントラ」のタイトルロール、「コシ・ファン・トゥッテ」ドラベッラ、「カルメン」メルセデス、「リゴレット」マッドレーナ、「カルメル会修道女の対話」クロワッシー修道院長、などでオペラに出演。艶やかな声と親しみのあるキャラクターで聴衆を楽しませる。またヘンデル「メサイア」やベートーベン「第九」、モーツァルト「ハ短調ミサ」「レクイエム」などのソリストを務める。第3回下町たいとう親善大使。聖徳大学音楽学部講師。台東区民合唱団ボイストレーナー。日本声楽アカデミー会員。



ケイト役 田中由佳（Yuka Tanaka）ソプラノ

日本大学芸術学部音楽学科声楽コース卒業。日本オペラ振興会オペラ歌手育成部修了。イタリアにてB・フリットリ氏マスタークラス受講、ディプロマ取得。今までに「フィガロの結婚」伯爵夫人、「魔笛」侍女1、「こうもり」ロザリンデ、「カルメン」メルセデス、「イリス」ディーア等出演する他、東京、埼玉、神奈川を中心にオペラ、コンサートに多数出演。音楽団体「イマデキプロジェクト」主宰。藤原歌劇団準団員。日本オペラ協会準会員。



グロー役 高橋拓真（Takuma Takahashi）テノール

静岡市出身。武蔵野音楽大学音楽学部音楽教育学科卒業。同大学院修士課程修了。武蔵野音楽大学静岡県東部新人演奏会に出演。東京オペラ・プロデュース、2014年<ミレイユ>より合唱にて多数出演、<戯れ言の饗宴>ラーポを好演。2016年<<ぼんて☆きあーれ>>を立ち上げ、<秘密の結婚>でパオリーノを演じた。現在、武蔵野音楽大学研修員。新国立劇場合唱団。藤原歌劇団準団員。日本オペラ協会準会員。



ヤマドリ公爵役 根岸一郎（Ichiro Negishi）テノール

武蔵野音楽大学声楽科、早稲田大学仏文専修卒業。パリ第IV大学（比較文学）修士。日仏声楽コンクール、フランス音楽コンクール、アンリ・ソーゲ国際コンクールに入賞。中世・ルネサンス音楽から現代作品まで幅広く活動し、特にフランス近代歌曲での評価が高く日仏声楽コンクール審査員を務める。CD「伊福部昭の団体歌」など。東京室内歌劇場、日本フォーレ協会、コンセル・C会員



ボンゾ役 高橋雄一郎（Yuichiro Takahashi）バス

埼玉県蕨市出身。桐朋学園大学トロンボーン科を経て、声楽を志す。二期会オペラ研修所第53期修了。これまでに「フィガロの結婚」バルトロ、「魔笛」ザラストロ、「リゴレット」スパラフチーレ、「ラ・ボエーム」コルリーネ、「ワルキューレ」フンディング等多くのバス役を歌い演じている。二期会準会員、蕨市音楽家協会会員。



神官役 吉永研二（Kenji Yoshinaga）バリトン

熊本県天草市出身。大分県立芸術文化短期大学、同大学専攻科を首席で修了。東京芸術大学声楽科バス専攻を卒業し、武蔵野音楽大学大学院音楽研究科博士前期課程修了。クラシックから歌謡曲まで幅広いレパートリーを持つ。現在、武蔵野音楽大学研修員。カルチャーセンター新所沢店講師。



ヤクシデ役 大倉 修平（Shuuhei Ookura）バリトン

国立音楽大学声楽科卒業。これまでに『カヴァレリア・ルスティカーナ』アルフィオ、『ラ・ボエーム』ショナール、『仮面舞踏会』サミュエル、『トゥーランドット』役人、『椿姫』医師グランヴィル、『ジャンニ・スキッキ』グッチョ、『アドリアーナ・ルクヴルール』キノー役等でオペラ公演に出演。



友人役 加護友也（Yuya Kago）テノール

奈良県生まれ福岡県育ち。昭和音楽大学声楽科声楽コース卒業。声楽を森岡憲昭、井ノ上了史の各氏に師事。学内でD.Mazzola氏マスタークラス受講、同試演会、スペイン歌曲公開講座などに出演。演劇「この世を花にするために」篤史役、ミュージカル「アクアの肖像」水樹役等出演。同大学大学院1年次に在学中。



友人役 男山俊太郎（Shuntaro Otokoyama）テノール

昭和音楽大学声楽学科声楽コース4年。北海道函館市出身。BS-TBS「昭和名曲アルバム」に昭和音楽大学合唱団として出演。声楽を木村淳子に師事。



友人役 安塚久理人（Kurito Yasuzuka）テノール

昭和音楽大学声楽コース3年。栃木県佐野市出身。声楽を柿沼信美、松浦健に師事。BS-TBS 日本名曲アルバムに昭和音楽大学合唱団として出演。2年時の一年間D.Mazzola氏のマスタークラスを受講。

1900年（明治33年）親父橋。現在の人形町小網神社付近。芳町（よしちょう）は江戸初期、吉原遊郭（旧吉原）だった。



1904年（明治37年）「蝶々夫人」初演年の銀座通り。この数年前から路面電車が走り始めた。服部時計店が見える。





蝶々さんの従姉妹役 沼田真由子 (Mayuko Numata) ソプラノ

武蔵野音楽大学、同大学大学院声楽専攻修了。大学院在学中に NTT ドコモより奨学金を授与される。オペラ「ヘンゼルとグレーテル」(グレーテル・露の精)、「ホフマン物語」(オランピア)他、二期会サロンコンサート等多数の公演に出演。二期会 BLOC“Liebeslieder” メンバー。二期会会員



蝶々さんの母役 高橋千夏 (Chinatsu Takahashi) ソプラノ

昭和音楽大学卒業。故・五十嵐郁子、照屋江美子の各氏に師事。第1回日本歌曲コンクール奨励賞受賞。W. マッテウツィ、M. デヴィーア、D. マッソーラ各氏によるマスタークラス受講。第82回読売新人演奏会に出演。Teatro Progetto Nuovi 公演「修道女アンジェリカ」タイトルロールで出演。スガナミ音楽教室声楽講師。



蝶々さんの叔母役 山口なな (Nana Yamaguchi) ソプラノ

昭和音楽大学声楽学科を首席で卒業。片野坂栄子、的場辰朗の各氏に師事。第18回 KOBE 国際音楽コンクール B 部門優秀賞並びに兵庫県教育委員会賞受賞。桜美林大学プルヌスホール主催音楽劇「銀河鉄道の夜 2014」に出演。第87回読売新人演奏会に出演。バルバリナーナでオペラデビュー。現在藤原歌劇団準団員、日本オペラ協会準会員。



蝶々さんの友人役 菊池未来 (Miku Kikuchi) メゾソプラノ

岩手県出身。昭和音楽大学卒業。公益財団法人日本オペラ振興会オペラ歌手育成部第37期修了。「秘密の結婚」フィダルマ、「カルメン」メルセデス、「ラ・チェネレントラ」ティーズベを演じる。これまでに村松玲子、故細川久美子、鈴木とも恵、八尋久仁代各氏に師事。藤原歌劇団準団員、日本オペラ協会準会員。



蝶々さんの友人役 高橋みのり (Minori Takahashi) ソプラノ

中央大学経済学部卒業。社会人を経て東邦音楽大学大学院、同大学ウィーンアカデミー修了。東京国際芸術協会および国際芸術連盟新人オーディション合格。第4回東京国際声楽コンクール愛好家部門第2位 (1位なし)。ハイドン「天地創造」のソリストをつとめる。声楽を白石敬子、武藤直美、片岡啓子各氏に師事。



蝶々さんの友人役 中島麻紀子 (Makiko Nakashima) メゾソプラノ

東京音楽大学音楽教育専攻卒業。第2回春の声声楽コンクールプロ部門他に入賞、入選。これまでにオペラ「魔笛」「エフゲニー・オネーギン」、「イオランタ」、オペレッタ「こうもり」等出演し、バロック音楽のコンサートや教会にて宗教音楽等のソリストを務める傍らピアノ伴奏等の活動も行っている。東京室内歌劇場会員。

西洋人が創り上げた「日本文化」と、男性が創り上げた「女性像」

最初にお断りしておくと、私が演出する『蝶々夫人』は日本を舞台にしていません。日本人として、日本という設定にこだわって演出することが私にはどうしても良い方向に働かないと思うからです。

蝶々夫人は日本人にとって難しいオペラだと思います。我々が日本人である以上、オペラで紹介されている日本文化は何も違和感なく受け入れることができます。違和感を感じるのは、その文化が間違っていて扱われている時だけです。我々はどうしても日本という知り尽くした国からの視点でこのオペラを捉えがちです。つまり日本人は、純粋な形でこの物語を、違う文化を持った外国人同士のぎこちない愛の物語と捉えにくいのです。大事なのは日本とアメリカという限定された国で起こった出来事なのではなく、2つの異なる文化を持った者たちの間で起こった話であるということだと思います。愛という形を通して、ある国の文化が他の国の文化に飲み込まれていく、それがこの物語の本質なのではないかと思いますし、日本という国が辿ってきた歴史であり、日本人が描くべき『蝶々夫人』だと思っています。

日本ほど多くの文化を捨て、西洋の文化を取り入れた国はないと思います。谷崎潤一郎が『陰翳礼讃』という随筆で嘆いたように、便利だという理由で、日本人にとって不釣り合いな物をどんどん取り入れてきました。その順応さが、日本という国をここまで発展させた所以であると同時に、そのことで日本は今も多くのものを失い続けています。

日本が辿ってきた歴史の断片として、物語の中で蝶々さんは、ピンカートンへの愛を証明するために幾つかの文化を捨てます。お歯黒を捨て、宗教を捨て、異国の挨拶を取り入れようとしします。そうすることで、他国の人とコミュニケーションが取りやすくなっていくのです。

私が、このオペラを上演するにあたって見逃したくないのは「文化」という他に、男性が創り上げた「女性像」というものがあります。『蝶々夫人』は3人の男性によって創作されています。原作のルーサー・ロング、それを戯曲化したベラスコ、それをオペラ化したプッチーニ(台本を書いたという意味ではジャコーザとイリッカも)です。私はこの男たちが、物語の中で理想の女性たちを作り上げているように思えます。ただひたすら異国で愛する男を待つ女性、異国で結婚を交わしたにも関わらず、それを咎めもせずもの分かり良く全てを(異国で出来た子供までも)受け入れる妻……。私はそこに違和感を感じます。それは男性が考える女性のあるべき姿で、男性の操り人形のようにも感じられます。奇しくもロングの小説も、ベラスコの戯曲も、プッチーニのオペラも、蝶々夫人を「おもちゃの人形」と形容しています(小説と戯曲ではケイトが、オペラではピンカートンが)。

このオペラは蝶々さんの自害で締めくくられます。オペラに自害はつきものです。ただ、この自害は自国の文化を象徴したものでもあり、男性に対する女性としての反逆でもあり、文字通り命をかけて守った日本人としての、女性としてのプライドに他ならないと思うのです。

田丸一宏

## 歌劇「蝶々夫人」あらすじ

### 第1幕

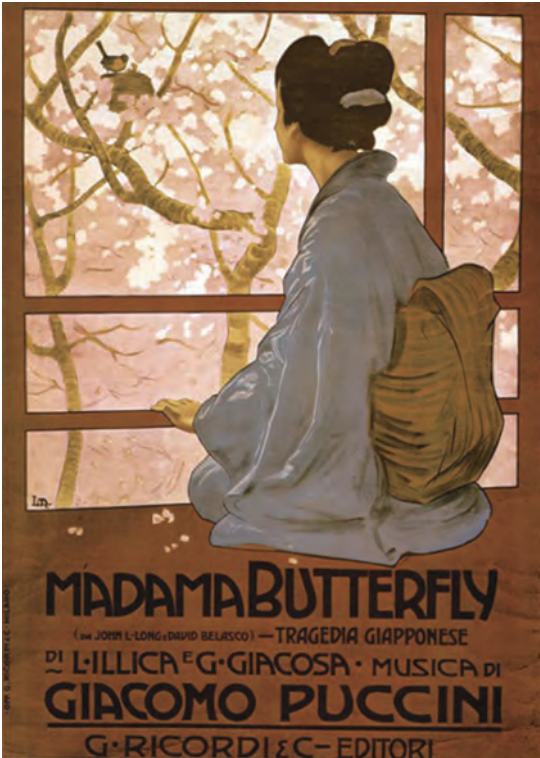
長崎の港を見渡せる、山の中腹にある家。

口入屋のグローが、アメリカ海軍の士官ピンカートンのご機嫌を取りながら、彼の新婚用の日本家屋や、女中や下男たちを紹介している。そこへ、今日の結婚式に招かれた総領事のシャープレスがやって来る。ピンカートンは領事にウィスキーを勧め、ヤンキーは世界のどこでも気ままに旅して、美しい花を手になければ気がすまないと、ヤンキー気質を謳歌する歌を歌う。生真面目な領事は、何と自堕落なことだと慨嘆する。2人は「アメリカ万歳」と乾杯し、シャープレスはピンカートンに、本当に彼女を愛しているのかと質す。ピンカートンは、真実の恋か気まぐれの恋か、それは分らないと答えるので、領事は罪作りのことは絶対にしないようにと諭す。

間もなくグローが花嫁の到着を知らせると、遙か彼方から美しい女声合唱が響いて来る。長唄「越後獅子」の旋律が奏され、綺麗な花嫁衣裳の蝶々さんが登場する。領事が彼女の身の上を訊ねると、自分の家がかつて武家だったが、ある事件で父親が切腹してから、家が落ちぶれそのために芸者になったと顛末を語る。そこへ親類や役人たちが入って来て、ステージは益々華やかになる。蝶々さんは持って来た小物入れから、これが仏像、これが父親が切腹した短刀と言いつつ出し、説明する。そして彼女は、昨日1人で教会に行き、キリスト教に改宗して来たと告げるので、ピンカートンは改めて感動する。

グローのお静かにという声で、結婚式が挙行される。神官が厳かに祝詞を挙げ、三々九度の神式の杯が交わされる。そして2人は婚姻届に無事サインをし、親戚一同との乾杯も終わる。皆がほっとしているところへ、僧侶で叔父のボンゾが「憎い奴め」といって怒鳴り込んで来る。ピンカートンはその理不尽さに、何を騒ぐかと一喝するが、ボンゾは蝶々さんが改宗したことを責め、親戚一同を促して退場してしまう。

涙にくれる蝶々さんと、ピンカートンの2人だけが舞台に残る。夕闇が迫り空には星が瞬き始め、女中のスズキが読経を始める。 重い花嫁衣裳を脱いだ蝶々さんは、白無垢の夜着に着替える。そしてここから、第1幕の最後を飾る長大で美しい愛の二重唱になる。蝶々さんが、みんなにこうして捨てられてしまったが、でも幸せですと歌うと、ピンカートンも、もう絶対に離さない、お前は私のものだと、彼女を固く抱きしめる。ここでは歌もさることながら、オーケストラの響きが雄弁で、官能と恍惚の気分を歌い上げて余すところがない。特に「美しい夜、きらめく星」と歌うクライマックスの部分がとり分け美しい。



### 第2幕

3年後の蝶々さんの家。スズキが一心不乱に祈っている。神様、これ以上蝶々さんを悲しませないでくださいと。彼女は机の引き出しを開けてみせ、残金がほとんどないことを示し、早く帰って来てくれないと困るとこぼす。そしてうっかり、外国の旦那さんはいったん帰国したら、みんな戻りませんと、口をすべらせてしまう。それを聞いた蝶々さんは、きっと旦那さんは帰って来ると激しく叱りつけ、有名なアリア「ある晴れた日に」をうたい出す。彼女の余りの純真さに、スズキはそっと涙をぬぐう。うたい終わったところへ、シャープレスとグローがやって来る。領事はピンカートンから、手紙が届いたことを知らせる。蝶々さんは喜んで、あの人は駒鳥が巣を作る頃に帰って来るといったが、もう3度も作った。アメリカの駒鳥は、いつ巣を作るのかと訊ねる。これを聞いてグローが笑い出し、蝶々さんは怒って彼を追い回しているところへ、金持ちのヤマドリがやって来て、外国人の旦那を諦めて自分の妾になれと口説くが、軽くあしらわれて追い帰される。領事は例の手紙を取り出して、ピンカートンが帰ってくることを告げる。だが蝶々さんがそれを聞いて余りにも喜ぶので、彼がアメリカ人の女性と結婚したというくだりを読むことが出来ない。そしてそれとなく、ヤマドリの求愛を受けたらというと、蝶々さんは急に怒り出し、彼に本当に捨てられたら、死ぬか元の芸者に戻るかのどちらかだと答える。そしてピンカートンとのあいだに出来た、子供を連れて来て悲痛なアリア「坊やのお母さんは」をうたう。領事はもう何もいえず、すごすごと帰って行く。

するとそのとき港の方から、軍艦の入港を知らせる大砲の音がするので、蝶々さんとスズキは急いで廊下に出る。それがピンカートンの乗った、アブラハム・リンカーン号だと分かると、2人は「花の二重唱」をうたい、庭から花という花を摘み取って、座敷一杯に撒き散らす。夕日が落ちて静かな夜が訪れ、蝶々さんとスズキ、それに子供は窓のそばでピンカートンの帰りを待つ。そして神秘的な「ハミング・コーラス」が聞こえ、次第に更けて行く夜の雰囲気盛り上げる。

蝶々さんは一晩中一睡もせず待っていたが、スズキは子供を膝に居眠りをしている。やがて目を覚ましたスズキは、坊やと少しおやすみになられたらというと、蝶々さん子供を抱いて別室にさがる。するとそこへピンカートンと、シャープレスがあらわれるので、スズキはびっくりする。スズキはこの3年間、辛い目に会いながらも、蝶々さんはじっと我慢して来たことなどを話す。それを聞いたピンカートンは、後悔に苛まれて胸を痛める。スズキは庭の片隅に立っている外国人の女性をみて、あの方はどなたと領事に訊ねると、領事はピンカートン夫人だと弱々しく答える。そこで領事はケート夫人が、子供を育てたいといっているの、何とか蝶々さんを説得して欲しいと頼む。その間ピンカートンは花で飾られたかつての愛の巣に接して、後悔の念に駆られてアリア「さらば愛の家」をうたい、その場にいたたまれずに去ってしまう。

ケート夫人は自分の胸のうちを、スズキに切々と訴えるので、スズキもやむなく伝言を承知する。そこへ出て来た蝶々さんは、領事とケート夫人の姿をみて、すべてを悟ってしまう。領事から事情を聞いた蝶々さんは、子供はお渡しするから、もう30分もしたら来てくださいというので、領事と夫人は暇を告げて出て行く。蝶々さんは仏間に入って蠟燭を灯し、仏壇に祈りを捧げて、父親の片身の短刀の鞘を払う。そして喉に突き立てようとすると、襖が開いて子供が駆け込んで来る。彼女は子供をしっかりと抱きしめ、悲痛なアリア「可愛い坊や」をうたう。最後のキスをすると、子供に目隠しをして、屏風の蔭に隠れて喉に短剣を突き立てる。そのとき「蝶々さん、蝶々さん」と叫びながら、ピンカートンが飛び込んで来る。そして亡骸にすがり付いて、泣き崩れるピンカートン。悲劇の幕が閉ざされる。 出典：モバイル音楽事典 © 出谷 啓



プッチーニ(1858-1924)

長崎1880年

ロング(1861-1927)

オペラ「蝶々夫人」の原作は、アメリカ人の作家ジョン・ルーサー・ロングが、自身の姉の日本滞在経験を基にした、短編小説「蝶々夫人」(1898)です。この小説はダヴィッド・ベラスコ(1853-1931)により「蝶々夫人～日本の悲劇」として戯曲化されました。1900年「トスカ」のイギリス初演のためにロンドンに滞在していたジャコモ・プッチーニはこの芝居を観て大感激、オペラ「蝶々夫人」の作曲へとつながります。実はロングの小説「蝶々夫人」には先行作品があります。フランス人の作家ピエール・ロチ(1850-1923)は、1885年フランス海軍トリファント号の艦長として長崎に寄港、18歳の日本女性オカネサンと過ごした日々を、帰国後小説「マダム・クリザンテーム(お菊さん)」としてフィガロ紙に発表します。この小説は19世紀後半のジャポニスムのブームに乗り大ヒット、同名のオペラも作曲されました。

これらの作品はいずれも舞台が長崎で、白人の海軍士官と日本人現地妻との物語という共通点があります。「お菊さん」と「蝶々夫人」の大きな違いは、相手の白人が戻ってくるか否かです。つまり「お菊さん」は、主人公のピエールが日本を去ることで物語が終わりますが、「蝶々夫人」の海軍士官ピンカートンは、3年後にアメリカ人の妻と日本に戻ります。さらに小説と戯曲の「蝶々夫人」の一番の違いは、最後に蝶々さんが自死するか、未遂に終わるかです。つまり小説では自殺未遂をほのめかしていますが、戯曲では蝶々さんの自死で物語が終わります。どちらが劇的であるかは明らかです。幕末から明治維新にかけて、日本全国で外国人の殺傷事件が連続して起こり、その多くの場合、襲撃した日本人が関係国の外交官の前で公開切腹に処されました。それが欧米に伝わり、自死を許さないキリスト教徒にとって、日本人の象徴としてのハラキリが広まり、オペラ「蝶々夫人」が成功する一つの要因になりました。

「蝶々夫人」が白人の目から見た、植民地主義という側面があることは事実です。私たちに馴染みのある、シーボルト(1796-1866)やグラバー(1838-1911)もまた、日本人妻を娶り子孫を残しています。しかし当時の日本では、共同生活をすることは許されても、正式な結婚をして海外に移住することは許されていませんでした。日本の初めての正式な国際結婚は1893年オーストリア＝ハンガリー帝国の駐日代理大使として東京に赴任していた、ハインリヒ・クーデンホーフ伯爵(1859-1906)と青山光子(1874-1941)です。アメリカの正式な異人種間結婚はこれよりもずっと遅く、合衆国法の異人種間結婚禁止法が廃止されたのがようやく1967年、州法に至っては2000年まで存続したそうですから驚きです。2007年には、英国の著名なオペラ研究者が「蝶々夫人」が人種差別的であるとして、作品の書き換えを要求して、物議をかもしだしました。



川上貞奴(1871-1946)

鹿鳴館(1883-1887)

オペラ「蝶々夫人」の成立には、世界に羽ばたいた三人の日本人女性が大きく関わっています。

#### 川上貞奴～世界の女性解放の先駆け

日本橋生まれの貞奴は、7歳で人形町の芸妓置屋「浜田屋」の養女となります。丁度そのころ、日本橋では有馬小学校(1874)、小学十思学校(現在の日本橋小学校)(1877)が開校、貞奴も小学校で学ぶチャンスはありましたが、浜田屋での修行を選びました。その後、時の総理伊藤博文に最厚にされ、日本一の芸者と言われるまでになります。興味深いことに貞奴は、外国との社交場として明治政府によって建てられた鹿鳴館の接待役として出入りしていました。前述のフランス人作家ピエール・ロチが、1885年鹿鳴館の夜会に訪れた際には遭遇していたはずですが、1894年、貞奴はオッペケペー節で有名な川上音二郎と結婚、欧米での興業が大変な話題を呼びます。特に1900年のパリ万博での公演では、ピカソ、ロダン、ドビュッシーなどの大芸術家を魅了しました。貞奴の功績は、コルセットに象徴される従来までの女性の階級化を否定し、天真爛漫な解放された新しい女性のセクシーさを表現したこととされています。19歳の若き天才ピカソ(1881-1973)が描いた、当プログラム表紙と下の二点の貞奴の絵は「死のベリーグダンス」と言われます。1902年4月25日、プッチーニはミラノで貞奴の舞台に接します。オペラの中の蝶々さんが、次第に独立した国際的な思考を持つようになり、同時に日本の古くからの精神性を重んじ、自死に至るという姿は、貞奴の生き様とも重なります。日本の女性解放運動が平塚雷鳥(1886-1971)らにより誕生したのが1911年ですから、それよりも10年以上前、貞奴がその芸により世界の女性の精神の解放や地位の向上を担っていたことは驚きであり、また彼女が日本橋に生まれ育ったことを、日本橋オペラとして誇りに思います。



パリ万博(1900)

ピカソ作 貞奴(1901)

ピカソ自画像(1900)



蝶々夫人初版本(1904)

大山久子

幸田延

三浦 環

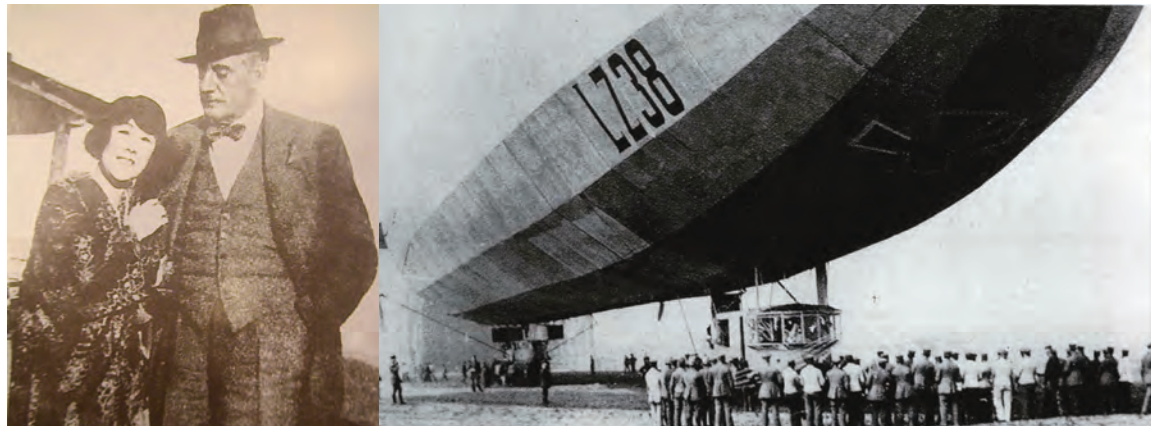
## 大山久子～明治期の真の国際的日本女性

プッチーニのオペラ「蝶々夫人」の作曲にあたり、もっとも貢献した日本人は、駐イタリア公使夫人であった大山久子(1870-1955)です。久子の夫、大山綱介は外務省の役人で、久子も夫と共に、1888年-1895年(パリ、ハーグ、ウィーン)、1899年-1906年(ローマ)と長期間ヨーロッパに滞在しました。当時、フランス語、ドイツ語、イタリア語、英語を自由に操れる日本人女性はいなかったはずで、また久子の幼馴染の幸田延(のぶ)(1870-1946)は、日本人音楽留学生第一号として6年間欧米でピアノとヴァイオリンを学び、帰国後東京音楽学校教授をつとめた、日本洋楽界のパイオニア的存在でした。そのつてもあり「蝶々夫人」を作曲していたプッチーニに求められ、日本の楽譜やレコードを提供して、また様々なアドバイスを与えました。久子は1904年2月27日ミラノ・スカラ座で、歴史的失敗となった「蝶々夫人」の初演を聴いていますが、さぞがっかりしたことでしょう。ちなみにこの失敗公演からわずか3ヶ月後には、大幅に書き換えられた第二版となる「蝶々夫人」がブレスシアで上演され、こちらは大成功して、その後世界各国で上演されるようになります。一方日本では同年2月に日露開戦、翌1905年5月には日本海海戦でロシア・バルチック艦隊を撃破したことから、世界の日本に対する目も、それまでの奇異な極東の小国から、大国ロシアを破った、ある種の尊敬を受けることになります。これは「蝶々夫人」初演版の「クモやハエを食べる、あほな日本人」と日本人を蔑視する部分が第二版ではカットされ、せいぜい「お歯黒」にびっくりする程度になったこととでも判ります。なお大山綱介の重要な任務は、イタリア製の軍艦(船籍アルゼンチン)を購入する交渉であり、日露開戦とほぼ同時に2隻の軍艦(日進、春日)がイタリアから日本に到着しています。大山久子の活躍は、萩谷由喜子が著した《「蝶々夫人」と日露戦争》(中央公論新社2018)に詳細が記されています。



ミラノ・スカラ座19世紀末

装甲巡洋艦日進



三浦 環とプッチーニ

ツェッペリンLZ38飛行船

## 三浦 環～日本人初の国際的オペラ歌手

銀座に生まれた三浦環(たまき)(1884-1946)は、東京音楽学校でピアノを瀧廉太郎に、声乐を前述の幸田延にそれぞれ師事しました。幸田延はピアノやヴァイオリンの先生ですが、当時はまだ声乐の教授はおらず、つまり環は独学で歌手になりました。1914年ベルリンに留学しますが、一週間も経たないうちに第一次世界大戦が勃発、敵国となったドイツからイギリスに逃れます。翌1915年5月31日、ついにロンドンで「蝶々夫人」の初主演の舞台に立ちます。驚くことに出演の依頼を受けたのが同年4月ということで、1ヶ月ちょっとの特訓で全曲を暗譜しました。このとき環にイタリア語を無報酬で教えたのは、偶然にも前述の大山夫婦の長女澤田美代子でした。ロンドン・オペラハウスでの公演当日、第二幕の途中で、にわかに騒がしくなり大砲の音が聞こえました。これはピンカートンの船の到着を告げる大砲ではなく、死者7名、負傷者35名を出したドイツのツェッペリンLZ38飛行船の、初のロンドン空襲の音だったのです。当然公演は打ち切りになりました。その後三浦環は、実に2000回の「蝶々夫人」を欧米で歌います。1920年4月20日ルッカ近郊トレ湖畔の山荘で、環はついにプッチーニと面会します。プッチーニは環の蝶々さんを絶賛して「これからもあなたの蝶々さんを演じてください」と語りました。三浦環2001回目の蝶々さんは、1936年6月歌舞伎座に於いてイタリア語で、翌1937年1月には大阪中之島公会堂で、環自身の翻訳した日本語で歌われました。三浦環の功績は、オペラ「蝶々夫人」の世界のスタンダードを確立したことに尽きます。



藤田嗣治(1886-1968)作  
蝶々夫人とピンカートン(1951)

河口湖畔のお墓  
日本橋オペラ代表の福田祥子が、三浦環ゆかりの地を訪れました。

ロンドン・王立オペラ  
日本橋オペラ代表の福田祥子が、三浦環ゆかりの地を訪れました。

## 日本橋オペラの沿革

|        |                                                         |
|--------|---------------------------------------------------------|
| 2013 年 | 中央区在住のオペラ歌手福田祥子と指揮者佐々木修が中心となり、日本橋オペラ研究会が中央区社会教育団体として発足。 |
| 2013 年 | ワーグナーアカデミー「トリスタンとイゾルデ」(演奏会形式)<br>(日暮里サニーホール)            |
| 2014 年 | ワーグナーアカデミー「ジークフリート、さまよえるオランダ人」(演奏会形式)<br>(日暮里サニーホール)    |
| 2015 年 | 日本橋オペラ第1回公演<br>ワーグナー「トリスタンとイゾルデ」(日本橋劇場)                 |
| 2016 年 | 日本橋オペラ第2回公演<br>プッチーニ「トスカ」(日本橋劇場)                        |
| 2017 年 | 日本橋オペラ特別公演〜デュオリサイタル<br>(ヒッレブランド、ヴァレントヴィッチ両氏招聘)(日本橋劇場)   |
| 2018 年 | 日本橋オペラ第3回公演(中央区文化推進事業 助成対象事業)<br>マスカーニ「イリス」(日本橋劇場)      |

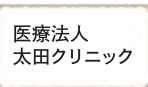
## 日本橋オペラは皆様にお約束します！

- 1) 高い水準のオペラ公演を、中央区から世界に発信します。
- 2) 若手芸術家の育成に努めます。
- 3) IMSLP(国際楽譜プロジェクト)への楽譜の提供を通じて、世界の音楽界に貢献します。
- 4) 地域の病院、学校、老人施設等でのボランティアコンサート、オペラの立稽古の公開を通じて、地域の皆様と歩みます。
- 5) オペラ公演の可能な、中央区の公共ホール建設運動を推進します。
- 6) 中央区を中心とする企業との連携を高めて、日本を代表するCSR(企業の社会的貢献)活動のモデルを構築します。
- 7) 会費は全て、オペラ公演の経費とさせていただきます。
- 8) 日本橋オペラの全ての活動を通じて、中央区、日本橋のブランド向上に努めます。

## 日本橋オペラ後援会

- ・日本橋オペラの事業目的に賛同していただける個人・法人。
- ・会費：年額 [個人] 1口2万円 [法人] 1口5万円、1口以上
- ・特典：日本橋オペラ公演のご招待券、プログラムの進呈(2名様)  
日本橋オペラ公演プログラムへのご芳名を顕彰させていただきます。

後援企業(2019年5月15日現在)



## 日本橋オペラ2019

歌劇「蝶々夫人」全曲

作曲／ジャコモ・プッチーニ

台本／ジュゼッペ・ジャコーザ、ルイーダ・イッリカ

原作／ジョン・ルーサー・ロングの短編小説「蝶々夫人」

戯曲化／デーヴィッド・ベラスコの「蝶々夫人」

《イタリア語上演・日本語字幕付・ピアノ伴奏》

内閣府関連施策「明治150年」関連事業

日本橋劇場(日本橋公会堂4F)

2019年5月26日(日)14:00

第1幕：50分 第2幕：80分  
(休憩：20分)

指揮／佐々木 修 演出／田丸一宏

ピアノ／パオロ・トロイヤン Paolo Troian (Italia)

蝶々さん／Madama Butterfly／福田祥子／ソプラノ

ピンカートン／B.F. Pinkerton／上本訓久／テノール

シャープレス／Sharpless／飯田裕之／バリトン

スズキ／Suzuki／栗田真帆／メゾソプラノ

ゴロー／Goro／高橋拓真／テノール

ケイト／Kate Pinkerton／田中由佳／ソプラノ

ヤマドリ／Prince Yamadori／根岸一郎／テノール

神官／Il Commissario Imperiale／吉永研二／バリトン

ボンゾ／Bonzo／高橋雄一郎／バリトン

ヤクシデ／Yakuside／大倉修平／バリトン

蝶々さんの母／高橋千夏，従姉妹／沼田真由子，叔母／山口なな

親戚と友人／菊池未来，高橋みのり，中島麻紀子

男山俊太郎，加護友也，安塚久理人

助演／黒木佳奈，小林 裕，大 美穂，吉田由布子

## スタッフ

舞台監督／水谷翔子 照明／関 嘉明 衣裳／萩野 緑 ヘアメイク／エイミー前田

稽古ピアノ／小滝翔平，松岡なぎさ，鈴木架哉子 字幕機材提供／まくうち

全席自由一般 4,800円 中央区民割引 2,400円 子供(6歳以上)～学生 1,000円

《チケット・お問合せ》株式会社マエストロ 《チケット》e+(イープラス)

主催：日本橋オペラ研究会(中央区社会教育団体)